

農村から郊外住宅地へ

交通の発達によって大都市である大阪・神戸へのアクセスがよくなった精道村には、江戸時代からの農村風景や豊かな自然環境が残っていました。山と海が近く、空気と水が清らかで、景観が美しい六甲山地南麓の恵まれた環境を、私鉄会社は「風光明媚」「健康地」などのキーワードで表現しました。そして、その魅力に引き寄せられ、大阪や神戸から多くの人々が精道村へ転居し、それに沿うように、精道村の有力者は住宅地としての開発を進めていきました。

また、株式会社六麓荘によって昭和4～6年(1929～1931)に造成・分譲された六麓荘住宅地や、現在の芦屋市山手町内で府立大阪医学校の校長であった佐多愛彦が日本住宅土地株式会社社長阿部元太郎に委託し、昭和3～9年(1928～1934)に開発・分譲した松風山荘住宅地など、民間会社が開発した住宅地もありました。

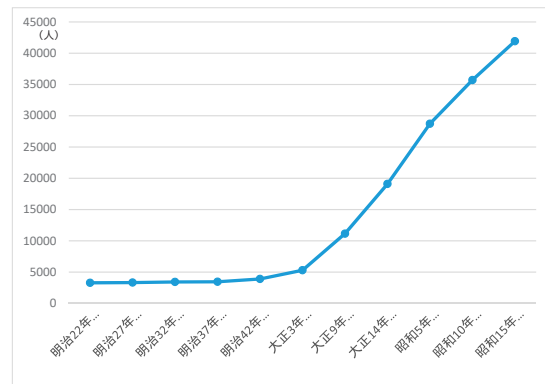
郊外住宅地になった精道村

精道村の住宅地としての価値が上昇する中、地元の有力者たちは大正6年(1917)から昭和14年(1939)にかけて土地耕地(土地区画)整理事業を実施しました。これによって精道村の広い範囲に基盤目状の街区が整備されました。

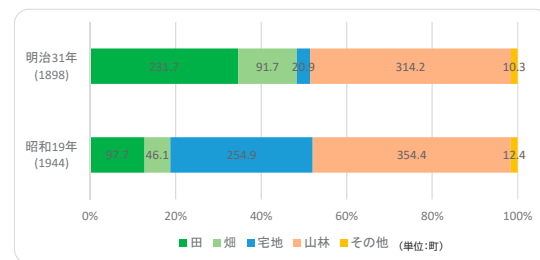


現在の三条町付近からみた精道村
(絵葉書：昭和初期撮影。カラー化)

北西から撮影。写真の中央やや上方を左右に貫く松林が芦屋川。西岸(写真中央付近)には芦屋仏教会館(昭和2年(1927)竣工。19ページ)が見える。農村の頃と一変し、住宅が建ち並ぶようすがわかる。



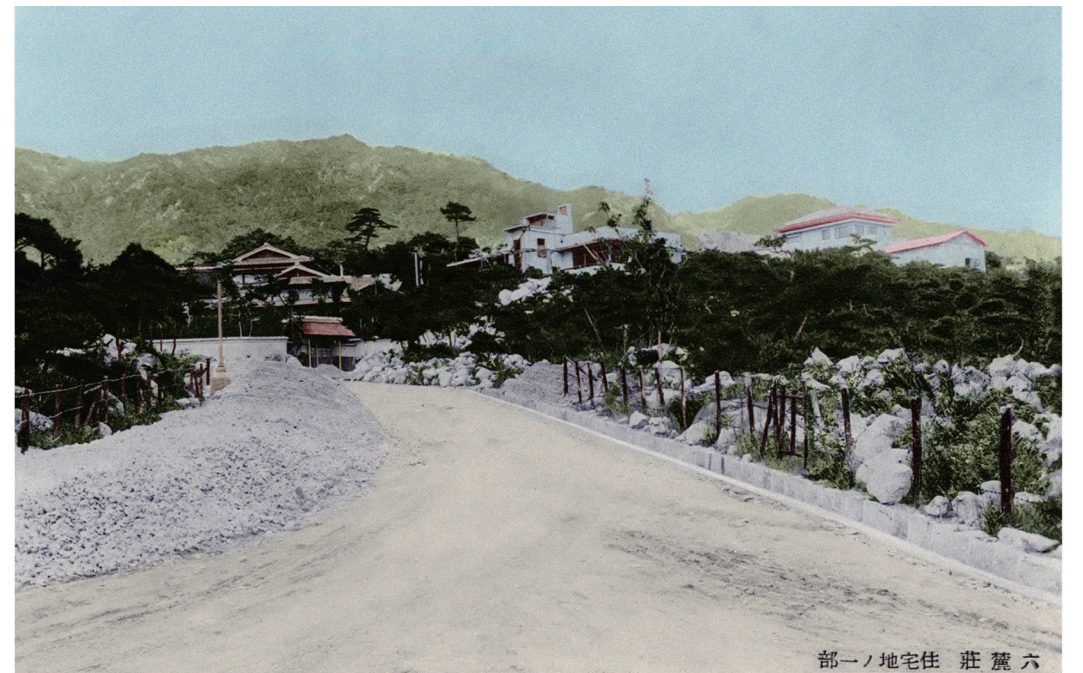
人口の推移



土地利用の推移

住宅地が大幅に増え、大正以降人口が急激に増加していることがわかる。

コラム 東洋一の健康地 六麓荘住宅地



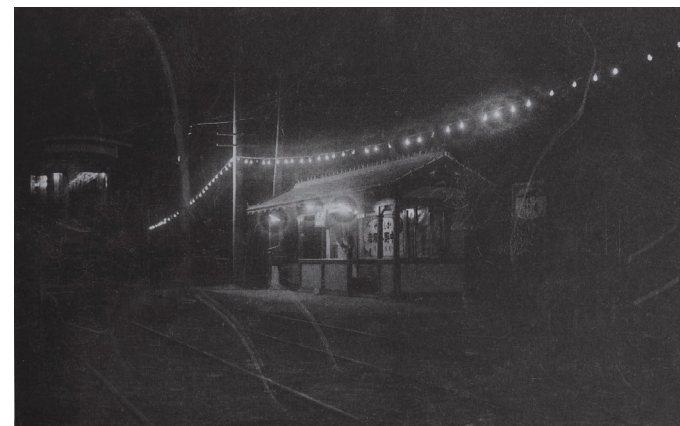
部一ノ地宅住 荘麓六

造成中の六麓荘住宅地 (絵葉書：昭和初期撮影。カラー化)

現在の六麓荘町のもととなる六麓荘住宅地は、「東洋一の健康地」をキーワードに株式会社六麓荘が昭和4年(1929)から昭和6年(1931)にかけて造成・分譲しました。当時としては珍しく、全面舗装された道路に上水道・下水道・都市ガスが整備され、さらに良好な景観となるよう電線を地下に埋設する画期的な試みもされ、交通機関としては六麓荘乗合自動車も運転されました。

また、住宅地全体で一つの日本庭園となるよう設計されており、自然の地形をなるべく活かして「どんどん川」等の小川を敷地から敷地へと引き込み、川が道路を横切る11ヶ所にはデザインが異なる石橋が架けられました。

インフラの整備がはじまる



精道村では住宅地にとって必要不可欠なインフラ整備が進められました。

明治41年(1908)には阪神電鉄による電灯の供給が始まり、大正元年(1912)にはガスが供給されました。現在の打出町には、神戸ガス株式会社が設置した大きなガスタンクがありました。

阪神芦屋駅の電灯 (明治38年〔1905〕撮影)

「日本一の村役場」と呼ばれた精道村役場



精道村が発足した当初、村の役場は精道小学校内に設けられましたが、人口の増加などに伴い何度か移転を繰り返しました。そして、現在の市役所北館の北側（広場）の場所に大正12年（1923）に竣工した精道村役場は、鉄筋コンクリート造3階建て、総工費約63,000円で、当時「日本一の村役場」と称されました。

精道村役場復元模型

この建物は、昭和58年（1983）に解体された。現在、復元模型（縮尺1/75）が芦屋市役所の南館地下1階に展示されている。

精道村の歴代村長

明治22年（1889）4月1日に精道村が成立した後、村会議員選挙が実施され、4月25日に当選者が告知されて新議員が選出されました。

村長は村会で村会議員から選任されて村政を担当し、同時に村会議長をも兼ねていました。

なお、戦前の村長・村助役・村会議員は無給で務める名誉職でした。

代数	氏名	就任年月	退職年月
1	山村 忠左衛門	明治22年4月	明治28年7月
2	天野 小平次	明治28年9月	明治30年4月
3	山村 伊左衛門	明治30年5月	明治34年5月
4	中島 為次郎	明治34年10月	明治36年8月
5	猿丸 吉左エ門	明治36年12月	明治39年2月
6	猿丸 又左エ門	明治39年2月	明治40年10月
7	阪本 久七	明治40年10月	大正元年8月
8	大利 市右エ門	大正元年10月	大正4年12月
9	杉岡 藤右エ門	大正5年1月	大正6年7月
10	猿丸 又左エ門	大正6年7月	大正9年4月
11	松井 吉右エ門	大正9年7月	大正10年5月
12	杉岡 藤右エ門	大正10年7月	大正14年5月
13	助野 庄兵衛	大正14年6月	昭和2年10月
14	猿丸 吉左エ門	昭和3年2月	昭和5年4月
15	天王寺谷 忠左エ門	昭和5年6月	昭和6年2月
16	紙谷 文次	昭和6年8月	昭和10年8月
17	山村 伊左エ門	昭和10年9月	昭和11年9月
18	大利 市右エ門	昭和11年12月	昭和15年11月

コラム 芦屋市章に引き継がれる精道村章

昭和16年（1941）に制定された芦屋市の市章には、精道村章のデザインがそのまま引き継がれています。

精道村章は、大正6年（1917）頃にはつくられていたようですが、デザインが稚拙であったため、大正11年（1922）に改めて制定されたものです。その際、デザイン案が村民に懸賞付きで募集され、募集要項には「意匠は、できるだけ簡明に本村を表示するもの」、「当選者には、一等200円、二等50円の賞金を交付する」などの内容が盛り込まれていました。審査の結果、今の芦屋市章に続くデザインが一等に選ばれ、精道村章として採用されました。

そのデザインは、「精道村は、山を負い海に臨む風光明媚の地にして、芦屋・打出・三条・津知の旧四か村から成り、円満、平和にして隆々として発展の勢あり、すなわち山、海、四、円平、旭を図示する」に由来します。

精道村役場新築落成記念
絵葉書の封筒にみえる村章
(大正12年〔1923〕発行)



続々と整備される村の施設



The Ashiya public hall 芦屋公会堂

精道村立芦屋公会堂（絵葉書：大正～昭和初期発行）

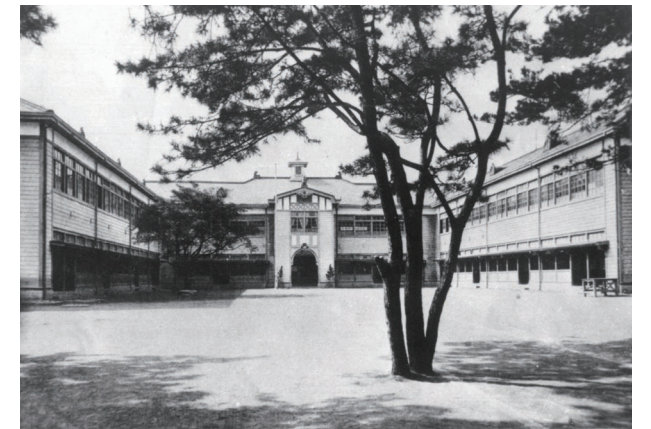
大正8年（1919）、現在の芦屋市民センターの場所に建設された。木造平屋造り・瓦葺きの御殿のような優雅な建物で、昭和38年（1963）まであった。

精道村はインフラが整備されることによって生活環境が飛躍的に向上しましたが、さらに、学校、病院、警察、消防、郵便局、公会堂（21ページ）などのさまざまな施設の整備と拡充が次々と行われ、明治の終わりから昭和の初めにかけて、住宅地としての礎が築かれていきました。

コラム 村名の由来は精道小学校



精道小学校の校庭で活動する児童たち



大正8年（1919）に新築された精道小学校の木造校舎

明治22年（1889）に芦屋村・打出村・三条村・津知村の四か村が合併するにあたって、新たな村の名前は、当時すでにあった精道小学校の校名から付けられました。

精道小学校は、明治19年（1886）の小学校令の制定に伴い芦屋小学校が改称したもので、「精道」の校名は西宮の漢学者である豊田政苗が「養精修道」の語から撰じたといわれています。

豊田政苗は旧尼崎藩士で、祖父の豊田吉次に従って漢学を修め、明治2年（1869）には尼崎藩権大参事という役職に就任した後、明治13年（1880）に池田中学校、明治16年（1883）に武庫中学校、同年西宮小学校の教師に着任し、明治17年（1884）には私立三余学校を設立した人物です。